

■ 原著

理学療法臨床実習成績と自尊感情・自己愛・対人恐怖心性との関係

— 教員の指導指針検討の手掛かりとして —

Correlations between clinical training results for Physical Therapist Students and their Self-esteem, Narcissism, and Anthropophobia

— As a clue to the teacher guidance guidelines —

成田 亜希¹⁾ 阿曾 絵巳¹⁾

Aki Narita¹⁾ Emi Aso¹⁾

1) 白鳳短期大学 リハビリテーション学専攻
〒636-0011 奈良県北葛城郡王寺町葛下1丁目7番17号
TEL 0745-32-7890 FAX 0745-32-7870
E-mail narita-aki@hakuho.ac.jp

1) Department of Physical Therapy, Hakuho College
1-7-17, Katsushimo, Oji-cho, Kitakatsuragi, Nara, 636-0011, Japan
TEL +81-745-32-7890

保健医療学雑誌 9 (2): 96-104, 2018. 受付日 2017年12月7日 受理日 2018年6月25日
JAHS 9 (2):96-104, 2018. Submitted Dec. 7, 2017. Accepted Jun. 25, 2018.

ABSTRACT: Students in physical therapy courses usually enter college directly after graduating from senior high school and are in their adolescence. It is known that self-esteem, narcissism, and anthropophobia are correlated with one another in the formation of adolescent self-image. These factors affect the clinical training of physical therapy students. Correlations between the results of training assessment and self-esteem, narcissism, and anthropophobia were examined in students (N=89). Results indicated that students with an affirmative self-image had better training results. Moreover, students with a high-level of narcissism had better results in the final training whereas a high level of anthropophobia had a negative effect on training results. It is important for students in physical therapy courses to become sociable when participating in clinical training. Furthermore, instructors should help students develop an affirmative self-image.

Key words: self-esteem, narcissism, anthropophobia

要旨: 理学療法士学生は高等学校卒業後、現役で入学する学生が多く、発達過程では青年期にある。青年期の自己像を形成する上で自尊感情、自己愛、対人恐怖心性が存在し、理学療法臨床実習においても、これらの要素が影響すると考えられる。そこで89名の学生を対象に自尊感情・自己愛・対人恐怖心性が実習成績とどのように関係するかを調査した。各期実習において自己を肯定的に捉えている方が実習成績は良い結果であった。また最終実習でのみ、自己愛が高い学生ほど実習成績は良かった。対人恐怖心性と実習成績の間には負の関係性が示唆された。理学療法臨床実習では、社会性を身につけておくこと、かつ学生が自己に対して肯定的な感覚を持つことができるような指導をする必要がある。
キーワード: 自尊感情、自己愛、対人恐怖心性

はじめに

理学療法臨床実習は、1病院（施設）に学生1人または2人での学びが多い。学生一人ひとりが違った環境での実習となる。そのため、臨床での学びの結果として生じる認知・感情、有能感、充実感は様々である。臨床実習では、知らない場所や知らない人との関わりが数多く存在し、それらと向き合っていかなければならない。青年期は社会に踏み出し、新しい世界で活動を始める時期であり、理学療法士養成課程学生はまさにその時期にある。青年期の自己像を形成する上で自分自身への評価を行う自尊感情、自分への関心を持つ自己愛、対人場面での緊張を引き起こす対人恐怖心性などが重要であると考えられており、理学療法臨床実習でもこれらの要素は非常に関連が深いと考える。

自尊感情とは自己概念に対する自己評価の感情である。自己イメージにおける肯定的な面と否定的な面が存在するとされている。肯定的な面としては、有能感、自信、前向き、積極的、満足感などがある。否定的な面としては、無能感、無力感、劣等感、後ろ向き、消極的、不満感などがある。佐藤¹⁾によると、自尊感情の低すぎる人は、何か人に称賛されると自分の低い自尊感情との不一致からかえって落ち着かなくなり、自尊感情の高すぎる人は、人から称賛は受け止められるが批判を受け入れることができないとしている。これらのバランスが重要とされている。

自己愛とは自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求である。自己愛はパーソナリティ障害の臨床症状として扱われるが、青年期特有の人格的特徴でもある。中島²⁾によると、独り立ちに際しては、自分というものを強く意識し、その存在を周りに認めてもらおうとする気持ちも強まって自己愛的な状態が生じやすくなるとしている。

対人恐怖心性とは、一般の青年にみられる対人恐怖の心理的傾向である。鎌倉³⁾は、自分が他人からどう見られているのかについて不安になる、自分が相手に嫌な感じを与えていると思うといった自分や他人が気になる心性を強く感じている大学生が時代の変化と共に増えている可能性は否定できないとしている。

また、これらの3つの心理的状态には関係性が認められており、自尊感情は自己愛傾向とは正の相関関係に、対人恐怖心性とは負の相関関係にあるとされている³⁾。

そこで本研究では、理学療法臨床実習の成績が学業成績以外のどのような側面の影響によるものかを探索した。自尊感情・自己愛・対人恐怖心性の各々が実習成績との間にどのような関係があるのかを調査し、教員による指導指針の手掛かりを得たので報告する。

対象と方法

1. 調査対象

理学療法士養成校 A 短期大学生 89 名（男性 14 名、女性 75 名）。平均年齢は 1 年次が 19.46 ± 2.40 歳であった学生である。

2. 調査時期

3 年間の実習時期は、見学実習：1 年次（2 月・1 週間）、評価実習第 I 期：2 年次（11 月・3 週間）、評価実習第 II 期：2 年次（1～2 月・4 週間）、総合実習第 I 期：3 年次（4～5 月・8 週間）、総合実習第 II 期：3 年次（6～7 月・5 週間）である。自尊感情・自己愛・対人恐怖心性における質問紙調査実施時期は、見学実習の場合は実習終了後 3 日目に、評価実習と総合実習については 2 期間の中間時点で実施した（評価実習の場合は 12 月、総合実習の場合は 6 月である）。本来は各期実習前後で調査し、実習前後での変化を捉えながら行うべきであるが、頻回な調査を行うことで学生に心理的ストレスを与えることも考えられ、見学実習・評価実習・総合実習という実習種別の大きな括りでの調査実施とした。また対象者には、調査結果と実習との関連を確認することが目的であると説明しているため、実習後に調査をしている見学実習、評価実習第 I 期、総合実習第 I 期については、実習の出来具合に影響された回答になっている可能性は否定できない。また実習前に調査している評価実習第 II 期、総合実習第 II 期については、前の実習での出来具合が影響されることも大いに考えられる。

3. 実習成績

各期実習の評価表点数を用いた。実習評価表は、実習地格差をなくすために、臨床実習指導者と担当教員が同席の下に点けられるものである。4 段

階評定であり、臨床実習指導者や学生には段階評価しかわからない状態になっており、実際には段階に点数付けがされている100点満点のものである。

4. 質問項目と分析方法

(1) 自尊感情に関する質問は、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を桜井 (2000) が日本語版に修正したもの⁴⁾を質問順序の入れ替えのみ行い使用した。自己イメージにおける「肯定面」と「否定面」各5項目、計10項目からなる。回答は、「全然あてはまらない」(1点)～「非常にあてはまる」(5点)の5段階評定であった。分析方法は、自尊感情の高さについては、「肯定面」の回答そのまま、「否定面」の回答は反転させ(1点⇔5点, 2点⇔4点)、それらの合計点を用いた。自尊感情タイプについては、自己イメージが「肯定的」「否定的」の下位尺度得点の高いものをその学生のタイプとして用いた。

(2) 自己愛に関する質問は、小塩 (1999) が作成した自己愛目録短縮版⁵⁾を使用した。「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の下位尺度ごとに各10項目、計30項目からなる。回答は、「全然あてはまらない」(1点)～「非常にあてはまる」(5点)の5段階評定であった。分析方法は、自己愛の高さについては、回答の合計点を用いた。自己愛タイプについては、「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の下位尺度得点合計を偏差値に直し、一番高いものをその学生のタイプとして用いた。

(3) 対人恐怖心性に関する質問は、堀井・小川 (1997) が作成した対人恐怖心性尺度⁶⁾を理学療法士学生用に文言のみ修正し使用した。「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きていることに疲れている悩み」の下位尺度ごとに各5項目、計30項目からなる。回答は、「全然あてはまらない」(1点)～「非常にあてはまる」(5点)の5段階評定であった。分析方法は、対人恐怖心性の高さについては、回答の合計点を用いた。対人恐怖心性のタイプについては、「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きていることに疲れている悩み」の下位尺度得点合計を偏差値に直し、

一番高いものをその学生のタイプとして用いた。

5. 手続き

質問紙調査は集団で行われた。ホームルームの時間に質問紙を配布した。回答は対象者ペースであった。全員の回答が終了したのを確認後、回収した。

6. 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては、白鳳短期大学 倫理委員会の承認(承認番号:白研倫17014)を得た。

7. 統計的検定

「自尊感情の高さと実習成績の関係」「自己愛の高さと実習成績の関係」「対人恐怖心性の高さと実習成績の関係」「自尊感情と自己愛の関係」「自尊感情と対人恐怖心性の関係」には、正規性の確認を行い、Pearsonの相関係数を用いて両者の相関を確認した。「自尊感情タイプにおける実習成績の比較」には、正規性の確認後、等分散性の検定(Levene検定)を行い、2標本t検定を用いた。「自己愛タイプにおける実習成績の比較」「対人恐怖心性タイプにおける実習成績の比較」には、Kolmogorov-Smirnovの正規性の検定を行い、正規性を認めた場合は1元配置分散分析を用い、認めなかった場合はKruskal-wallis検定を用いた。すべての統計解析には、SPSS statistics 17.0を使用し、有意水準は5%とした。

結果

1. 自尊感情と実習成績の関係

(1) 自尊感情の高さと実習成績の関係

各期実習において自尊感情の高さと実習成績との相関をみた。評価実習第I期・総合実習第II期では、 $r=0.294$ ($p<.05$), $r=0.230$ ($p<.05$)と正の相関がみられた。学生の自尊感情の高さと実習成績の高さは有意な関係性を示した。見学実習・評価実習第II期・総合実習第I期では、 $r=0.172$, $r=0.187$, $r=0.203$ と相関はみられなかった。

(2) 自尊感情タイプにおける実習成績の比較

Table 1は、各期実習における自尊感情タイプ別の実習成績平均値(MEAN)と標準偏差(SD)を示したものである。

見学実習の実習成績平均値は、肯定的で 78.97 ± 7.76 , 否定的で 77.32 ± 9.38 であり、t検定に

て(両側検定: $t(87)=0.847, p>.05$)と有意差は認められなかった。

評価実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、肯定的で 85.88 ± 9.23 , 否定的で 81.18 ± 11.41 であり, t 検定にて(両側検定: $t(87)=2.026, p<.05$)と有意差が認められた。自尊感情が肯定的な学生の方が実習成績は高かった。

評価実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、肯定的で 82.82 ± 10.68 , 否定的で 79.69 ± 9.47 であり, t 検定にて(両側検定: $t(87)=1.444, p>.05$)と有意差は認められなかった。

総合実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、肯定的で 80.47 ± 10.92 , 否定的で 73.94 ± 13.77 であり, t 検定にて(両側検定: $t(87)=2.301, p<.05$)と有意差が認められた。自尊感情が肯定的な学生の方が実習成績は高かった。

総合実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、肯定的で 83.78 ± 12.43 , 否定的で 79.30 ± 13.54 であり, t 検定にて(両側検定: $t(87)=1.543, p>.05$)と有意差は認められなかった。

2. 自己愛と実習成績の関係

(1) 自己愛の高さと実習成績の関係

各期実習において自己愛の高さと実習成績との相関をみた。総合実習第Ⅱ期では, $r=0.227$ ($p<.05$)と正の相関がみられた。学生の自己愛の高さと実習成績の高さは有意な関係性を示した。見学実習・評価実習第Ⅰ期・評価実習第Ⅱ期・総合実習第Ⅰ期では, $r=0.105, r=0.128, r=0.197, r=0.062$ と相関はみられなかった。

(2) 自己愛タイプと実習成績の比較

Table 2 は、各期実習における自己愛タイプ別

の実習成績平均値(MEAN)と標準偏差(SD)を示したものである。

見学実習の実習成績平均値は、注目・賞賛欲求で 78.78 ± 9.14 , 優越感・有能感で 77.60 ± 9.25 , 自己主張性で 76.86 ± 7.89 であり, 自己愛タイプを要因に1元配置分散分析を行った結果, 有意差がみられなかった ($F(2, 86)=0.349, p>.05$)。

評価実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、注目・賞賛欲求で 83.86 ± 9.85 , 優越感・有能感で 83.03 ± 11.89 , 自己主張性で 81.92 ± 10.71 であり, 自己愛タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果, $p=0.846, p>.05$ と有意差は認められなかった。

評価実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、注目・賞賛欲求で 78.72 ± 9.05 , 優越感・有能感で 80.71 ± 11.39 , 自己主張性で 83.54 ± 8.76 であり, 自己愛タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果, $p=0.117, p>.05$ と有意差は認められなかった。

総合実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、注目・賞賛欲求で 78.65 ± 14.47 , 優越感・有能感で 74.48 ± 13.67 , 自己主張性で 75.76 ± 10.51 であり, 自己愛タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果, $p=0.445, p>.05$ と有意差は認められなかった。

総合実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、注目・賞賛欲求で 79.68 ± 12.72 , 優越感・有能感で 81.39 ± 15.47 , 自己主張性で 81.80 ± 10.94 であり, 自己愛タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果, $p=0.701, p>.05$ と有意差は認められなかった。

Table 1. The average of the grade scored in practical training (MEAN) and the standard deviation(SD) according to the types of self-esteem in each practical training period

| | Positive | | | Negative | | | P-value |
|-----------------------------------|----------|-------|----|----------|-------|----|---------|
| | MEAN | SD | N | MEAN | SD | N | |
| Visit training | 78.97 | 7.76 | 32 | 77.32 | 9.38 | 57 | n.s. |
| Evaluation training(Stage I) | 85.88 | 9.23 | 34 | 81.18 | 11.41 | 55 | * |
| Evaluation training(Stage II) | 82.82 | 10.68 | 34 | 79.69 | 9.47 | 55 | n.s. |
| Comprehensive training (Stage I) | 80.47 | 10.92 | 32 | 73.94 | 13.77 | 57 | * |
| Comprehensive training (Stage II) | 83.78 | 12.43 | 32 | 79.30 | 13.54 | 57 | n.s. |

*: $P<0.05$ n.s.: not significant

Table 2. The average of the grade scored in practical training (MEAN) and the standard deviation(SD) according to the types of narcissism in each practical training period

| | Feature attention ・ Praise desire | | | Superiority feeling ・ perceived competence | | | Self-assertiveness | | | P-value |
|-----------------------------------|--------------------------------------|-------|----|---|-------|----|--------------------|-------|----|---------|
| | MEAN | SD | N | MEAN | SD | N | MEAN | SD | N | |
| Visit Training | 78.78 | 9.14 | 37 | 77.60 | 9.25 | 30 | 76.86 | 7.89 | 22 | n.s. |
| Evaluation training (Stage I) | 83.86 | 9.85 | 29 | 83.03 | 11.89 | 34 | 81.92 | 10.71 | 26 | n.s. |
| Evaluation training (Stage II) | 78.72 | 9.05 | 29 | 80.71 | 11.39 | 34 | 83.54 | 8.76 | 26 | n.s. |
| Comprehensive training (Stage I) | 78.65 | 14.47 | 31 | 74.48 | 13.67 | 33 | 75.76 | 10.51 | 25 | n.s. |
| Comprehensive training (Stage II) | 79.68 | 12.72 | 31 | 81.39 | 15.47 | 33 | 81.80 | 10.94 | 25 | n.s. |

*: P<0.05 n.s.: not significant

3. 対人恐怖心性と実習成績の関係

(1) 対人恐怖心性の高さと実習成績の関係

各期実習において対人恐怖心性の高さと実習成績との相関をみた。見学実習・評価実習第Ⅰ期・評価実習第Ⅱ期・総合実習第Ⅰ期・総合実習第Ⅱ期では、 $r=-0.090$, $r=-0.097$, $r=0.032$, $r=-0.102$, $r=-0.080$ と相関はみられなかった。しかし、対人恐怖心性と実習成績の間には負の関係性が示唆された。

(2) 対人恐怖心性タイプにおける実習成績の比較

Table 3 は、各期実習における対人恐怖心性の下位尺度タイプ「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きていることに疲れている悩み」ごとの実習成績平均値 (MEAN) と標準偏差 (SD) を示したものである。

見学実習の実習成績平均値は、「自分や他人が気になる悩み」で 82.20 ± 7.76 , 「集団に溶け込めない悩み」で 79.75 ± 11.96 , 「社会的場面で当惑する悩み」で 73.44 ± 7.69 , 「目が気になる悩み」で 76.00 ± 7.06 , 「自分を統制できない悩み」で 79.15 ± 5.96 , 「生きていることに疲れている悩み」で 78.00 ± 9.58 であり、対人恐怖心性タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果、 $p=0.042$, $p<.05$ と有意差が認められた。「社会的場面で当惑する悩み」タイプの実習成績は、その他のタイプに比べ実習成績は低い値を示した。

評価実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、「自分や他人が気になる悩み」で 88.35 ± 7.60 , 「集団に溶

け込めない悩み」で 82.71 ± 8.43 , 「社会的場面で当惑する悩み」で 75.47 ± 14.34 , 「目が気になる悩み」で 83.50 ± 11.11 , 「自分を統制できない悩み」で 82.82 ± 7.39 , 「生きていることに疲れている悩み」で 85.36 ± 9.73 であり、対人恐怖心性タイプを要因に 1 元配置分散分析を行った結果、有意差がみられなかった ($F(5, 83) = 2.904$, $p>.05$)。

評価実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、「自分や他人が気になる悩み」で 80.94 ± 11.86 , 「集団に溶け込めない悩み」で 77.64 ± 10.10 , 「社会的場面で当惑する悩み」で 80.12 ± 8.34 , 「目が気になる悩み」で 80.44 ± 11.00 , 「自分を統制できない悩み」で 81.27 ± 8.55 , 「生きていることに疲れている悩み」で 85.21 ± 9.41 であり、対人恐怖心性タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果、 $p=0.441$, $p>.05$ と有意差が認められなかった。

総合実習第Ⅰ期の実習成績平均値は、「自分や他人が気になる悩み」で 74.72 ± 11.49 , 「集団に溶け込めない悩み」で 70.23 ± 18.29 , 「社会的場面で当惑する悩み」で 77.88 ± 10.73 , 「目が気になる悩み」で 77.50 ± 12.53 , 「自分を統制できない悩み」で 78.08 ± 13.09 , 「生きていることに疲れている悩み」で 79.30 ± 13.28 であり、対人恐怖心性タイプを要因に 1 元配置分散分析を行った結果、有意差がみられなかった ($F(5, 83) = 0.856$, $p>.05$)。

総合実習第Ⅱ期の実習成績平均値は、「自分や他人が気になる悩み」で 80.33 ± 13.47 , 「集団に溶け込めない悩み」で 75.69 ± 13.63 , 「社会的場面で当惑する悩み」で 77.00 ± 15.76 , 「目が気に

Table 3. The average of the grade scored in practical training (MEAN) and the standard deviation(SD) in practical training for the subscale of anthropobic tendency in each practical training period

| | Worrying about being over anxious about oneself and others | | Worrying about being unable to become part of the group | | Worrying about being embarrassed in social situations | | Worrying about being over anxious about one's eyes | | Worrying about being unable to control oneself | | Worrying about being tired of living | | P-value | | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|--|-------|---|----|---|-------|--|----|--|-------|--------------------------------------|----|---------|-------|----|----|-------|-------|----|-------|-------|----|------|
| | MEAN | SD | N | N | MEAN | SD | N | N | MEAN | SD | N | N | | | | | | | | | | | |
| Visit Training | 82.20 | 7.76 | 15 | 16 | 79.75 | 11.96 | 16 | 18 | 73.44 | 7.69 | 18 | 16 | 76.00 | 7.06 | 16 | 13 | 79.15 | 5.96 | 13 | 78.00 | 9.58 | 11 | * |
| Evaluation training (Stage I) | 88.35 | 7.60 | 17 | 14 | 82.71 | 8.43 | 14 | 17 | 75.47 | 14.34 | 17 | 16 | 83.50 | 11.11 | 16 | 11 | 82.82 | 7.39 | 11 | 85.36 | 9.73 | 14 | n.s. |
| Evaluation training (Stage II) | 80.94 | 11.86 | 17 | 14 | 77.64 | 10.10 | 14 | 17 | 80.12 | 8.34 | 17 | 16 | 80.44 | 11.00 | 16 | 11 | 81.27 | 8.55 | 11 | 85.21 | 9.41 | 14 | n.s. |
| Comprehensive training (Stage I) | 74.72 | 11.49 | 18 | 13 | 70.23 | 18.29 | 13 | 17 | 77.88 | 10.73 | 17 | 16 | 77.50 | 12.53 | 16 | 12 | 78.08 | 13.09 | 12 | 79.30 | 13.28 | 13 | n.s. |
| Comprehensive training (Stage II) | 80.33 | 13.47 | 18 | 13 | 75.69 | 13.63 | 13 | 17 | 77.00 | 15.76 | 17 | 16 | 86.50 | 10.64 | 16 | 12 | 88.58 | 6.14 | 12 | 78.08 | 13.32 | 13 | * |

*: P<0.05 n.s.: not significant

なる悩み」で 86.50 ± 10.64 , 「自分を統制できない悩み」で 88.58 ± 6.14 , 「生きていることに疲れている悩み」で 78.08 ± 13.32 であり, 対人恐怖心性タイプを要因に Kruskal-wallis 検定を行った結果, $p=0.042$, $p<.05$ と有意差が認められた. 「集団に溶け込めない悩み」タイプの実習成績は, その他のタイプに比べ実習成績は低い値を示した.

4. 自尊感情と自己愛の関係

自尊感情得点と自己愛得点の相関をみた. 見学実習・評価実習・総合実習では, $r=0.386$ ($p<.05$), $r=0.370$ ($p<.05$), $r=0.291$ ($p<.05$) と正の相関がみられた. 自尊感情の高さは, 自己愛の高さと関係性を示した.

5. 自尊感情と対人恐怖心性の関係

自尊感情得点と対人恐怖心性得点の相関をみた. 見学実習・評価実習・総合実習では, $r=-0.582$ ($p<.05$), $r=-0.586$ ($p<.05$), $r=-0.654$ ($p<.05$) と負の高い相関がみられた. 自尊感情の高さは, 対人恐怖心性の高さと負の関係性を示した.

考察

今回の研究では, 理学療法臨床実習の成績が学業成績以外のどのような側面の影響によるものかを自尊感情・自己愛・対人恐怖心性との間から探索した.

まず自尊感情と実習成績の関係では, 評価実習第Ⅰ期・総合実習第Ⅱ期において学生の自尊感情と実習成績の高さは有意な関係にあることがわかった. 他の実習においても, 自尊感情の高い学生・自己肯定的な学生の方が実習成績は高い傾向にあった. 青年期は自分という人間に対する全体的なイメージ(自己概念)を形成していく時期である. とくに評価に関わる側面である「自尊感情」が影響する. 社会の中で一定の役割をもった自分という存在意義を自覚できたときにアイデンティティが確立していくのであろう. 臨床実習という学校社会から新しい社会に出たとき, 存在意義を自覚的に追及しようとする. 自分はこの程度はできるであろうと「自分に対する期待値」を定め, 願望がどの程度成功したかによって自尊心は決まると言われている. 理想自己と現実自己との距離を近づけることで自尊感情を高くもつことが

できるとされており, 臨床実習では失敗経験から学ぶことも大事であるが, できるという感覚を持たせること, 自信をつけさせることが大切であるといえる. 学内でしっかりと実技練習や実技試験を経験し, 現実自己を高めた上で臨床実習に向かい, 臨床でしか学べないことを体験し, 臨床実習指導者の指導の下, 自ら理想自己へ近づけていかなければいけない. これを学生自身に気づかせる導きやその環境を設定していくのが教員の責務であると考えられる.

次に, 自己愛の高さと実習成績との関係では, 総合実習第Ⅱ期において, 正の相関を示した. これは, 調査時期が総合実習第Ⅰ期終了後であり, 総合実習第Ⅰ期の実習で自信がついてきたことが自己愛を高め, 総合実習第Ⅱ期の実習がスムーズに進められ, 実習成績も高くなったのだと考えられる. 自己愛は自己に対する評価的態度である. 臨床実習という新しい社会において, 人からの評価を気にすることは多いと考えられた. 青年期の自己愛の高まりは自己尊重にもつながり, 自己形成にとっても重要な役割を果たすと言われている. 今回の研究でも自尊感情と自己愛傾向とは正の相関関係にあり, 適度な自己愛の高さが必要であることがわかる. しかし過度な自己愛は病理となることがあり, 誇大性や他の人の反応に過敏で対人不安や傷つきやすさを表すこともあるため教員はこのような反応を見落とさないような注意が必要である.

また各期実習において, 自己愛の下位尺度タイプ「注目・賞賛」, 「優越感・有能感」, 「自己主張性」ごとの実習成績には有意差は認められなかった. しかし, 見学実習・評価実習第Ⅰ期・総合実習第Ⅰ期では, 「注目・賞賛」タイプの実習成績が高い傾向にあった. これらの調査時期は実習終了後であり, 実習成績は良かったがもっと認められたい・ほめられたいと思う気持ちの現われであると考えられ, 逆に実習の成績が良い学生ほど, 注目・賞賛欲求は強くなる可能性は考えられる. また総合実習第Ⅱ期では, 「自己主張性」タイプの実習成績が良い傾向であった. これも, 調査時期が総合実習第Ⅰ期終了後であり, 総合実習第Ⅰ期の実習で自信がついてきたことから自己主張の傾向がみられ, それが自主性の面で高評価につながり, 実習成績が良くなっていることが考えられる. 自己主張については, 佐藤¹⁾は自己主張す

る傾向が高い学生は自我の強さを認識し、自分がこれまで成し遂げてきた努力を自分自身で評価しており、逆に不安感や他者への依存心が低いと示している。承認欲求や自立心が実習成績に良い影響を与える可能性があることが示唆された。しかし実習生という立場にあるため、自己主張のみが先行せず、臨床実習指導者の指導を素直に受け入れることとのバランスを忘れてはならないということを教員は指導すべきである。

最後に、対人恐怖心性と実習成績の間には負の関係性が示唆された。対人恐怖心が低い学生の方が実習成績は良い傾向を示した。福田・寺崎⁷⁾は、対人恐怖心性の高い人は対人恐怖心性の低い人と比べて、対人接触の機会や必要性が多い活動に対してやりがいを感じる事が困難であると示唆している。これは理学療法臨床実習でも同じことが言え、患者、患者の家族、臨床実習指導者など初めて出会う方との交流も多く、対人恐怖心性が高い学生ほど実習成績がよくないのはもちろんのことであろう。谷⁸⁾は、「個」と「関係」の葛藤が対人恐怖心性を引き起こすとしており、「個としての自己」と「関係の中の自己」の統合を促すアプローチが必要であるとしている。「個としての自己」に偏っている場合には、凝り固まった自己を揺さぶる方向を検討することがポイントとなり、失われている場への交流を促し、その場に応じた自己に作り変えていく支援の必要性を伝えている。それに対して、「関係の中の自己」に傾斜している場合には、自己の変容が場当たりのためとまとまりを欠くため、「個としての自己」を支える恒常性を維持するような支援がポイントとなり、自分らしさの核をつくるような働きかけが必要となるとしている。これについては、教員が普段の学内での様子から判断し、臨床実習指導者へご指導の参考として伝えておくべき情報であると言える。

また、対人恐怖心性の下位尺度タイプについては、見学実習において「社会的場面で当惑する悩み」タイプの実習成績が、その他のタイプに比べ低い値を示した。初めての实習であり、社会でのルールにすぐに適応できなかったことが予測される。そして総合実習第Ⅱ期においては、「集団に溶け込めない悩み」がその他のタイプに比べ低い値を示した。これについては、調査時期が総合実習第Ⅰ期終了後であり、総合実習第Ⅰ期は8週

間という長い実習であったにもかかわらず実習施設での指導者や患者様との関係性が築けなかったことが窺える。これについて、谷⁸⁾は、自分らしさの回復を目指すことがよいとしている。「平均値」といったものに惑わされずに、その人の「自分らしさ」を見出せることが支援の目標であると言う。自分という存在を他の人と比較するのではなく、自分らしく臨床実習に臨むことが実習をスムーズに進められるのであろう。そのため学内では集団性を教育することも重要であり、また臨床実習に出る前には、学外での社会的場面を経験させることも必要である。部活動やアルバイトなどの経験がない学生も多く、そういった経験をして臨床実習に向かうことで対人恐怖心性の低減は図れると考える。

そして鎌倉³⁾をはじめ、これまでの多くの先行研究において、自尊感情は自己愛傾向とは正の相関関係に、対人恐怖心性とは負の相関関係にあるとされている。今回の研究でも、自尊感情は自己愛傾向とは正の相関関係を示し、対人恐怖心性とは負の相関関係を示した。自己愛が自尊感情を調整する働きであるとも言われている。対人恐怖心性と自己愛傾向の関係では、次元間の組み合わせにより、自己感の不安定がみられることも明らかになっている。清水・岡村⁹⁾によると、対人恐怖心性と自己愛傾向の双方が高いタイプを誇大—過敏特性両性型とし、脆弱な現実自己を隠すための完全主義・強迫性と不安定な自己観を有するとしている。この他にも、対人恐怖心性が高く、自己愛が低い過敏特性優位群の場合、完全性の追求が希薄であり、失敗の恐れや否定的な自己観を有し、社会恐怖の診断基準に類似した状態であると推察されている。そのため、対人恐怖心性と自己愛傾向については、各次元の心理傾向のみでなく、双方を知り学生指導に努めなければいけない。

今回の研究では、理学療法臨床実習が普段の学業成績＝実習成績とならないところには、自己像が影響していることが窺えた。いかに自分自身を正確に評価できているかが重要である。そして、学生が自己に対して肯定的な感覚を持つことができるような指導を臨床実習指導者も教員も心がけなければいけないと考える。

以上のように学生の心の中を知り、表面に現れてくる表情・言動・行動がどのようなサインであるかを認知した上で教育につなげるという教育

実践研究を伝えていきたいが、質問紙調査の内容をどこに焦点化するか、また調査実施時期の違いにより明確化できないことも多く、課題は残されるが今後もより正確性の高い「教育と心理の関係性」を追及していきたいと考える。

引用文献

- 1) 佐藤淑子：日本の子どもと自尊心 自己主張をどう育むか. 中公新書, 2009.
- 2) 中島敬之：青年期の逸脱行動と自己愛 現代青年の理解の仕方ー発達臨床心理学的視点からー. ナカニシヤ出版, 1998.
- 3) 鎌倉利光：青年期における対人恐怖心性の特徴とその関連要因についての省察. 愛知大学教職課程研究年報 2 : 89-97, 2012.
- 4) 桜井茂男：ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学 発達臨床心理学研究 12 : 65-71, 2000.
- 5) 小塩真司：高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究 8-1 : 1-11, 1999.
- 6) 清水健司・海塚敏郎：青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連. 教育心理学研究 50 : 54 - 64, 2002.
- 7) 福田正人・寺崎正治：大学生における対人不安と生きがいの関連についてー対人恐怖心性の高さが生きがい感,生活満足感に及ぼす影響ー. 日本パーソナル心理学会大会発表論文集 18 : 156-157, 2009.
- 8) 谷冬彦：よくわかる青年心理学, pp32-75, ミネルヴァ書房, 2012.
- 9) 清水健司・岡村寿代：対人恐怖心性ー自己愛 2 次元モデルにおける認知特性の検討ー対人恐怖と社会恐怖の異同を通してー. 教育心理学研究 60 : 23-33, 2010.